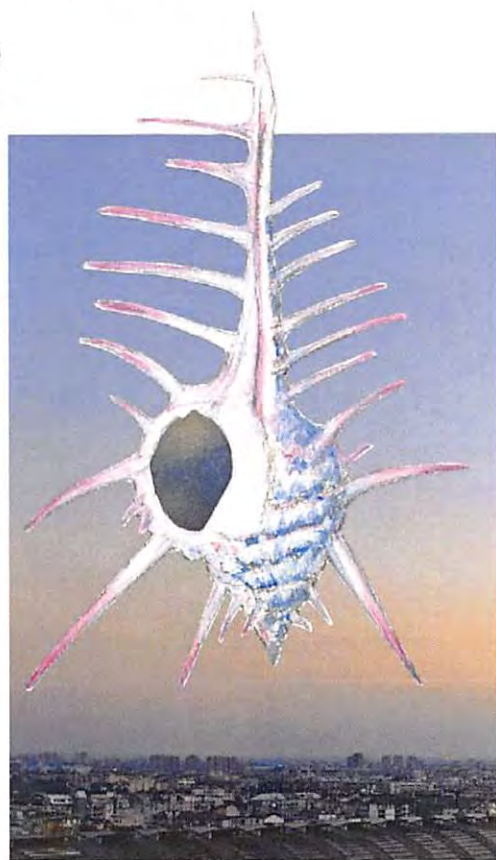


# 地中海

*MARE MEDITERRANEUM*

2021. 3



令和3年3月1日発行(毎月1回1日発行)第69巻第3号

No.754

## 創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の郷愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下してきた北上した、すべての未開なものを同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ気持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

# 地中海

二〇二一年 三月号 (通巻七五四号)

◇今月の二十首詠……新しき街

植田和子 2

■作品A

神田鈴子・菊地栄子他 4

A

角田玲子他 18

B

笠井秀子他 54

C

風早公恵他 66

A

中村博子他 80

■オリープ集

小原香里・近内静子 42

◇今月の二人

関西正子・森川淑子 14

香川進の生きものの歌 29

田土成彦 65

私と短歌との出会い (223)

島根美智子 17

■安部 律歌集『四月の翼』批評

佐藤淑子 34

「清涼感」溢れる歌集

横田敏子

■上林節江歌集『記憶の遺産』批評

田土成彦 38

三句切れの情趣

菊地栄子

◇春のアンソロジー 〈健やかさ〉

河上悦子 48

◇シルクロード・カフェ

【責任編集】 木村文子 50

■遊覧寄港 〈やる気スイッチ〉

古瀬由紀子 52

■歌壇月旦

玉井綾子 53

日本学術会議の任命拒否問題

■一月号作品批評

A……………藤田美智子・潮田千代 72

高橋啓子・根岸 亮

B……………植田和子・宮本靖彦

C……………中村博子

オリープ集……………大浪美雪

今月の二人・作品評

久我田鶴子 16

最近の歌誌より

【編集部】 71

第15期オリープ集メンバー発表……………47

お知らせ……………95

クリップ……………96 神田通信……………表3

## 新しき街

植田 和子

山を開き地下鉄沿いの新しき街に住みたり第一陣として

街の歴史と共に歩みて三十五年ここは二人の子らのふるさと

新築のわが家の庭に植えし木々おだやかに夏の日差しさえぎる

覚えなき枇杷の木が茂り実る庭を目印に来よ人も小鳥も

学園都市の駅に寄せては引く波の学生は去り夜の静寂

街の外れに広がる田畑・ビニールハウス・彼岸花の朱・野菜朝市

茸くさびらに取りつかれたる桜木の根元にひこばえのみどり新し

公園の枯れし桜の幾本に伐採予定の赤テープ巻かる

昭和十四年生まれ  
平成三年「地中海」入社  
大阪支社所属

ひこばえの若きいのちは容赦なく朽ち木と共に姿を消しぬ

厨の玻璃にやもりの白き腹の見ゆ張り付きてわが家を守りいるのか

「八つ手の花のような白い手かわいいね」玻璃の向こうのやもりに声かく

われ知らず拾い上げたるとんぐりの手に冷えびえと秋の訪れ

金色に光りて道を塞ぐ糸蜘蛛は結界を示さんとすや

白膠木の木に付子なる虫瘤まがまがしお齒黒の世の女をおもう

どろくさいと夫は好まぬむかご飯ほっこり素朴な味わいが好き

声もなくしばし見放くる瀬戸の海いま煌々と日が沈みゆく

この池に越冬するらしかいつぶり夕べ水辺に羽交い寄せ合う

如月のあわき光にまんさくの黄の細長き花びらふるう

飼わるるは幸や不幸やわが犬は隙あらば遁走せんと窺う

尻尾上げ老犬はわが前を行く共に歩かん背筋伸ばして

# 作品 A

神田 鈴子

従兄逝く

・大

しばらくを会はずりしまま従兄逝く眠りゐるのか花に埋もれて  
その面に額押し当てて泣きじやくる妻なる人の肩の細さや  
幼き日兄妹のごと遊びたる思ひ出がいま頭を駆けめぐる

一人娘、四人の孫に恵まれて幸せなりき従兄の一生

同い年なりし従兄と夫の一生 三十年早く逝きたる夫よ

気の合ひし二人にしあれば彼の世にて手を取りゐるや再会の日に  
喪中がき日毎ボストに舞ひ込めばふと甦る夫の逝きし日

菊地 栄子

ほのほのとして

・湾

一人なる暮らしに慣れて出で歩く両の手しるく爪が伸び立つ  
その内に来ると思えりこの世なるわが幸不幸あざないにつつ  
平穏に暮れゆくものか七十代おわりの年が間近にせまる  
手に取ればくだけんばかりに乾反りたる櫛のひと葉忍び入るとは  
細やかな葉っぱが路上にへばりつく音立てきたる村雨ののち  
丁度よき風呂の湯加減に四肢伸ばす 「しあわせ」などと思いたりしや  
入賞を祝いて帰る夕まぐれ昇れる月もほのほのとして

木村 文子

二〇二〇

・羊

新型のコロナが蔓延る一年を背負って地球は帰り来 冬至に  
曾祖父の遺いしスペイン風邪・続編 パンデミックは来世紀もまた  
地を這って生きる我らを見おろして白いカモメが空を滑りぬ  
池の面に沈む雨粒それぞれに今日の地球の記憶を放つ  
強く濃く寒気団に覆われてテレビの中の列島ムラサキ  
つなぎめのないなめらかさすると非日常が常の日となる  
この年を知らず逝きしを儂伴と言わんか父はいま帰り来なば

草刈 十郎

終着駅

・世

わが庭に来し秋の蝶いつまでもひとつの花を去り難くをり  
ふた親もはらからもみな亡くなりてけふ七五三の子ら見てをりぬ  
菊香る友のやさしき心根のわが身にしてみる日となりにけり  
風に散る落葉を焚きてわが余命温め長生きしたきと思ふ  
レールなき終着駅や通学の蒸気機関車けふ開戦日  
冬木立のなかをしきりに飛びまはり鳥は光とともに遊べり  
空の青残して山はひつそりと泰然として眠りゐるなり

國井節子

おんまつり

・春

近藤 栄昭

頼こする風

・虹

混沌と降つて湧きたるコロナ禍や何が起こるか解らぬこの世に  
 古きより奈良に伝はる「おんまつり」今年は中止胸のかそけし  
 来る年が穏やかなれと念じつつ春日の山 ひととき祈る  
 いつの日か笑顔で会へる日が来ると信じて待たう花の咲くころ  
 寒中を冬から春へ咲きつづく忙助椿母の好みし  
 寒き夜は白き湯気上げ一人鍋とほき海からはるばるようこそ  
 山里の駅に貼られしポスターの蟹が手招くいつか行かまし

河野繁子

師走

・雁

起き掛けに明けの明星たしかめて汁の具きさむ枷のごとくに  
 石橋をたたいて渡らぬ人なりと言わればそう 友温かし  
 誰も来ぬ正月なれど師走きてもらしい野菜孫へ荷作る  
 痛かゆき虫さされかと気付きたる帯状疱疹うつつに出会ふ  
 三週間ヘルペスウイルス滞在と書にあり闘う薬呑みこむ  
 指図どおり一週間で平癒せりコロナもきつとこんな日が来る  
 人々の切なる願いに耳かさず増殖、変異し地球をめぐる

小林能子

手術待つ朝

・羊

「おはやう」と若きナースの声のして吾が巡り鎖すカーテンが開く  
 感染に管制厳しき病院のベッドにひとり手術待つ朝  
 病院は金沢埋め立て3号地 古巣の職場に近きも縁か  
 わが孫の宮参りもその瀬戸神社なつかしき日々胸に満ちくる  
 病室より海を望めば鯨のごと黒々迫る房総半島  
 黒船とかミズーリ号とか旅客船も浦賀水道を入り来て 今  
 分からない明日への希望か昼も夜も船のゆきかふ湾の景色は

ポランテア行くぞとこぎでる自転車体をあおり頼こする風  
 将棋ポランテアにこにこ笑って攻めてくる銀の横行それはないのに  
 今月は進みてきたか認知症あちこち駒飛び盤上を読む  
 「詰みですよ」いえば笑顔の戻りくる敗勢耐えたまゆ根ひろがる  
 通所者が入所の荷物を持って立つ中庭向きのロビーの日差しに  
 気遣いを時々忘れるポランテア疲れる日あり帰りの自転車  
 踏み込むにペダル回らぬ交差点ころんと転んで自転車やめる

近藤 芳仙

イヴ

・信

イヴの夜はフイレ肩ロースまるかわで煙たてつつクリスト思ふ  
 上品に皿に盛りられし肉三種部位と冷たく分けられてゐる  
 千支の牛めぐりくる年明くるまで六日余りの急に愛しき  
 ゆず抹茶ポンポンショコラのチョコレート仏蘭西想ひつつ口にほほばる  
 巡礼地ルルドの切符をしをりにし本開くるたびマリアに会ふも  
 身動きも制限されて終りゆく歳末の辺にゆずを煮立てる  
 霜月の夕べに見たる宇宙船 地球の外を確かにゆけり

坂上直美

初雪

・天

贈られし百合の香匂う君の部屋本と花とに遺影は埋もれ  
 四冊の歌集を遺し君は逝く我を詠みたる歌もありけり  
 花のごとき我でありしか大昔君と出会いて婚をせしころ  
 猫の死は二人で耐えき君の死をいかにひとり耐えるべけんや  
 マンションは狭しかつて思いしが君なき今は空しく広し  
 君在さば「ほら初雪」と起こさなむ彼の時虹を見せしごとくに  
 パンドラは筐を抱きて丘に佇つ希望の翼翔けゆきし空

## 坂出裕子 川

・洛

おのづから川へ向かへる晴天の朝の散歩のかるきあゆみに  
浅き瀬を波立ちてゆく川波の白く光れる朝の陽を浴び  
透きとほる川の底ひに朝の日を浴びて小石の光れるが見ゆ  
さざ波を立てて流れてゆく水に星がきらめく秋の光の  
朝の日にピカリピカリと光りつつ流れゆく水しあはせならむ  
川の面を光り流れてゆく水にこころ癒やさる弱きころを  
川の面に光る朝日の輝きを見て帰りに来ぬけふのしあはせ

## 佐久間 晟

妻

・湾

誰も彼も心の友は去りてゆきここには独り妻が居るのみ  
思い出をこころに秘めて今日もまた歌を作るかわが事のため  
どこからか水の流るる音聞こゆ虚ろな心の救わるる思い  
ひとり居る野の松原にわれを置き蔭は去りゆく行方は知らず  
今日もまた妻と二人の夕食に変わらぬ煮物を黙し食みいる  
もしも、もしもこの妻無かりせばわが人生は如何にありしか  
この暮らして満足しているわれならん今日も無言の夕食終わる

## 佐藤道子

淋しさ

・甲

学問の高き慕はれ逝きし夫素直で優しい我が家の主  
一年を過ぐれど淋しさつこのりて共に食卓囲みてもらふ  
亡き夫の口癖「みんなと一緒」に」と夫の椅子寄せサラダを添へる  
紅芙蓉白く清らに咲き初むを気付かず過ぎし夫在る時は  
夕空は悲しきまでに澄み透るいとなみ途絶えしコロナの街の  
赤腹の声聞かずなり幾年か暑くなりゆく浅間山麓  
いつにても鳥は自由に住み替ふを動けぬ白樺暑さに枯れゆく

## 鈴木結志

しぶき水

・福

冬あらし湖波かぶり漁小屋のしぶき水の牙城を築く  
冬帝の館築くや軒つららナイルブルーの深きかがよい  
月宿るしぶき水の湖にきらめき止まぬ背きたたき  
ひかり汲むしぶき水のきらめきに讃辞の神酒をそぎたく寄る  
風物のしぶき水の木木挽むかじかむ冷えに潜む言の葉  
月詠みを氷中花にし大氷柱大地にとどき地のエキス吸う  
冬水田氷張りつめ大氷河思わずほどの寒のかじかみ

## 関根榮子

小豆粥

・埼

宮古島にはやもスミレの開花あり冬至の夕べのニュースに流る  
土鍋にて炊きている冬至の小豆粥母の逝きたる齡を越えし  
思い立ち小春日和を出でて来て畑の隅の残菊を刈る  
ささやかなひと冬の糧に庭先へ大根や人参を保存に埋める  
いつよりか晦日のお祓いせずなりてコロナ禍の今ふとよみがえる  
お祓いを済ませし小さき御幣もて晦日の夜の辻に送りしが  
七草をきざむ呪文の謎めくも「唐土の鳥が」は悪疫さすとう

## 関根和美

ベツレヘムの星

・埼

友よりの手作りリシュトレン有難くおくるみの御子待つ節となる  
距離たちもち地にあるわれらの仰きみる一期一会の星めぐり逢う  
大空に許されてあり土の星木の星近きそのディスプレイス  
ベツレヘムの星とも呼ばれる天体の奇しき「会合」よ冬至の空に  
この「会合」四百年の昔にもありしと天草四郎を思う  
次に見ることは叶わじ占星にたよらぬ身をもつましくする  
降誕祭ちかき御堂のうちそとに星々は降るまたたきながら



高尾 恭子 夕照 大

竹下 妙子 水雨 霧

もののふの情こころいちずに染まりゆく桜もみじの挽歌夕照  
上ばかり向いて歩いた 色づける楓、柿の実、鋭き百舌鳥の声  
ジャンプして通草採りたり髪しるき山の仲間の年少組は  
泣き顔も笑顔もひとしく毀ちたり五百羅漢はもみじを挿頭す  
ひさかたの光あまねき山門をくぐればふたたび還れぬ予感  
糸トンボ風に透きつつ消えゆけりサスペンダーの似合う人影  
遠き日の夕焼けこやけ柿の木の最後のひと葉はふるえていた

高津 砂千子 湯たんぼ 風

家の屋根にうっすら積もりたる雪をひからせ初日のほりく  
ヤッケ着て帽子をかむり物を干す午前七時はまだ日の出前  
コノシロの骨切りをして塩焼きに 地元広島産のものなり  
こな雪も落ち葉も風に巻きこまれ昼の公園人かげのなき  
藤の木の幹ごわごわとあらわなり凍てしるき中かたき芽抱く  
右足の第二指なせか痺ありてワセリンを塗るていねいに塗る  
湯たんぼのほほろぬくきを足もとに確かめ朝までもうひとねむり

滝田 靖子 冬 新

田土 才恵 運勢欄 宙

水細く出して食器を洗ひをり一人の夕餉終へし真夜中  
ひび割れた冬の指先慈しむ退職の君から貰ひしクリーム  
胸うちに吹き荒れる風の通り道冬の朝の耳鳴り止まず  
禍禍しきもの来るやうにひそひそと雪降るらしいなど言ひあへり  
自らの命を守る術さへも誰かに決めてもらふのかわれら  
それぞれの記憶をパッチワークして作られていく過去とふものは  
「年賀状はメールにしようその方が簡単だもん」簡単かさうか

霜なかに「ひこばえ」背く伸び立てるコロナに負けず生きむとぞ思ふ  
かすかなる光となりて初霜は黒きパンジーに煌めきみたり  
コロナ禍に街なか田舎も人まばら冬の落葉は地に燃えわたる  
稲光り射せるたまゆら水槽に立ち泳ぎするメダカひと群  
枯れ葉をつたひてわたる冬山の淡き稲妻音なく消ゆる  
わが指に線香花火夜のしじま冷ゆる空気に火は燃えてゐつ  
突然の水雨に濡れて花胡椒今年の命を静かにとぢる

田土 成彦 冬至 宙

午前七時冬至の空のしらみそめ忘れ物のやうな半月  
たそがれのやさしき光に枯れ枝がシルエットとなり空を指さす  
いつよりか降り出でし雨深更の目覚めに嘘きぬいのち寂しく  
何を得てなに失ひし意識なくかへりみるなく過ぎし平成  
落ちてゆく眠りのなかに聞きるしや遠木枯らしの過ぎてゆくおと  
画面では若さはじけるこの人も今は七十を過ぎたかと思ふ  
冬至の日の早き日暮れを背に負ひて今日の散歩は二十分弱

会えないと思ひし孫たち揃いたり静かに過ごすコロナ元旦  
受験生コロナ対策乗り越えて会いにきました従兄弟四人に  
一つ違い五人が揃う正月もあるとは言えぬ育ち盛りは  
わが背丈こえし五人の目映さに思ひ出操練る生まれこし頃  
保育器に長く入りし子のうえに眩しむばかりの今日の日のある  
信じるにあらねど今日の運勢欄元朝も読む新聞並び  
賀状より電話に代わる新年の挨拶増して古稀を越えゆく

玉井綾子

讚美歌

・羊

讚美歌のグロリアの歌詞が右脳から教会学校を連れて飛び出す心地良きクリスマス曲はインストゥルメンタルであれ讚美歌ならん讚美歌の番号と歌詞は埋もれてメロディだけが吾を連れ行く雨でなく天だとスマホに知る五十路あめにはさかえみかみにあれや讚美歌の歌詞・主の折りは文語なりその難しさに透けるラテン語讚美歌に番号ありて題はなしキリスト教につながる語のミサスイスでも合唱をせず讚美歌は一人が歌うコロナ禍のミサ

虎谷信子

七日正月

・伴

年賀なる やさしき丑の絵柄なれ。わが回り年 幸くあれかし出す賀状 七日正月なるをわぶ。今年ばかりはそぞろすさびが求めこし七草みわけ、ああこれが、その名と知るや、七日正月七種の漢字如何にと しらべたり。珍しき文字いささか まなぶせり・なづな・と 諺おぼえ年毎の、七日正月 七草雑煮角火鉢のまどる 赤あか燃ゆるなり。居眠る夢の須臾とぞあらむ七日正月 すぎし安けさ 鉄瓶のたぎちるる部屋、梅のほころび

中島央子

滑らかならず

・森

冬ちかき運河沿ひをゆく歩み流れのごとくなめらかならずうつつと詠ひ尽くせぬ詞抱き今日見し寺の紅葉が散るいく日も親しき人に会へずして誰に語らふ冬の夕焼くもり日の果て一筋の茜雲彼岸の第二人し語らむ人間のともす火赤く虚空を指す国のうれひとわれの愁ひと臘月のひかり射したる新墓の父とも母とも違ふわびしさかなしみも悔いもなひませ柚子匂ふ湯に目つむりて想ふことなし

中島義雄

新禧

・岡

コロナ禍も不況も今の世の嘆き朝日は初初の光もて輝る無造作に活けたる松の青々と生む影消し吾の書斎も寄せ鍋のおぶくに箸を差し入れて今宵絆の単位六人再びの斯かる躍動は世に無けむお好み焼きの花饅頭る銀杏を焼きて五粒六粒食むひらめき蘇れわが歌のうへ穂やかに膨るる餅を見守りて幸せとは斯く瞬の静謐一粒ひとつぶ黒き煮豆をつまみつついま暫くの視力待まむ

永塚節子

あの日

・銀

ひとひろの縁ののれんはガラス内 町一番の老舗店を閉ず襲われしは人のみならずあの日から厚きガラス戸閉ざされしまま張られたる画仙紙一面閉店を知らせる文字に乱れはあらず春を呼ぶ店のしつらえ染しみし七段飾りのおひなさまたちほそき目にお内裏さまは言いくれしもうすぐ春よ春はそこまであの日から冷たく暗き倉のなかおびなめびなは仕舞われしままなりわいを人を飲みこみなおもおも闊歩しやまぬ Covid-19

萩葉子

空

・銀

ふるさとの畑野がうかぶ青青と寒じめほうれん草店頭にあり寒風の歯科予約日は気が重く花のハンカチ握りしめてる駅までのバスの窓から四季の花愛でつつおりぬ「今年もよろしく」3Bの鉛筆二本けずりたり 今日でもこもり居テレビで散歩解体の家屋のあとちにビルが建ち空が狭まるバスからの空海鳥が小さなプラスチック吐く画像ちくりちくりと痛みが走るときどきは思い出してと道の辺の小さき花びら花の名知らず

白子 れい 頭を打つ ・ 洛

浜本 芙美 深夜灯 ・ 夢

人まばら夜のエスカレーター上りいてボタンと倒れゴツンと頭を打つ  
コロナ禍をおそれ手摺りに触れず付ち不意にふらつき揺れ倒れたり  
足は上頭が下に仰向けのまま起き上がれず運ばれいたり  
二・三日重かりし頭も平常に年賀状書きに追われる日々を  
ゆらゆらと水面に蒸気上りいて何時しか驚の姿も消ゆる  
黄の赤の落ち葉踏みしめ踏みしめて登る石段五十六段  
今日という日は再びはかえり来ず 一步 一步を踏みしめ歩まん

ばばりょうこ 楓の成長 ・ 鹿

三人の泊りの部屋にもんもと いびき テレビに 睡眠薬依存症  
かたわらではデンデンタイコにショウのフエ恨みもならずタメイキ合奏  
まどかなる月燦として冴えわたりわがもの顔に星を従う  
鉢植えの幼き楓わが庭に貰いうけ早やも少年となる  
或る日ふと気がつきたれば遅しき青年としなり眩しき見入る  
鉢を割る勢い増せる壮年の生命力をはっしと受ける  
酒好きの里親に似て酔い痴れん秋の最中をめぐめるく一樹

浜谷 久子 コロッケの唄 ・ 地

コロッケの倣の形を揚げていくコロッケの唄口ずさみながら  
二つとして同じ形のないコロッケ三十五個は時間を要す  
揚げ上がる頃には堪能コロッケの匂いも時間もたっぷり吸いこむ  
さっくりと揚がるコロッケ一人五個きつと明日もコロッケ朝食  
あっさりと胃にもたれないコロッケの食卓中央野菜を添える  
たっぷり具を入れ形をととのえて寝かせて揚げる久方ぶりを  
秋芋の太る季節を春ジャガを食べてしまおうレンピをさがす

金柑漬け届けくれたりキンカン色の深夜灯仰ぐ新年の朝  
新年の冷たき水にて顔洗い今年も頑張ると自らに言う  
日に一度自転車こぎて買い物にゆきたりし日のわれにもありし  
思いがけぬ所で足の指痛めし五体に不要なもの一つなし  
映像のばか笑いに心のせこれもいいかと納得をする  
岸を打つ波音高しうつしよは無駄ありてこそ生くる楽しさ  
つれあいの元気を幸せのひとつとし今日一日も終わらんとす

檜垣 美保子 冬の街 ・ 昴

橋脚に水面のひかり揺れながら這いのぼる負の気配あり 冬  
川の辺に餌を撒くおとこ立てば鳩羽裏をみせて向きをかえたり  
一丁目四番の街区ひとめぐり堂々めぐりの思考たずさえ  
電子音やうちにかすか鳴りつづけ三日目正体不明をたのしむ  
雨にぬれ車の尾灯つらなりて西へ西へ開はつやめく  
餅花と松のみどりをかざりたるひとりの年越し冷や酒一献  
こうこうと十四階のビル照らしおおつごもりの空わたる月

福田 庸子 冬火花 ・ 今

山上湖を染めて光は昇りたり冬の火花の尖りしままに  
湖岸に打ち上げらるる光彩の濃き色冬の空は乾きて  
谷深き小さき村を染めあぐる冬の火花のかがやき沁みて  
コロナ禍を打ち破るぞと山上湖に今宵沁みたり鍵屋の意気よ  
山間の冬の夜長し染めあぐる火花色濃く低く上がるも  
凍空に光はじきて谷あひを灯す火花のかなしきほどに  
湖のめぐりの山にひびきあふ冬の火花は我を貫く

藤田美智子 霜柱 新

還るべき土地を白地と呼ぶ人知られぬままにまた年が暮る  
四十度の体温をもつといふカラス雪降るなかを黒くろとゆく  
雪残る畑に紅き色を見す落ちたるままにされし林檎は

いつさいの実を落としたりする枝先に積むには重きはすの雪積む  
雪の夜にわれの知らざる音を聴く耳を病みある君は黙して  
〈気のもちやう〉など励ましの言葉になるものか屋根根より平ばたばた落ちる  
じやりじやりと霜柱踏む もつと早く手を打つことはできなかつたか

藤森 巳行 不器用 銀

コロナ禍でサンタが来れずアマゾンが代はりに配達と孫に教へぬ  
晴天の元日の朝祈るなりコロナの終息戦争無き世を

コロナ禍で新しき言葉覚えたり三密ソーシャルディスタンスパンデミック  
着実に一歩前進幸福と勝利を目指す勝負の一年

不器用な生き方してゐる俺の年牛の如く地道に歩む  
不器用な我が生き方が好きと言つたあの人は今安曇野に住む  
物事を適当にこなせぬ我が性に腹を立てつつ熱き茶を飲む

船田 清子 塩豆菫 天

柗の塩豆菫ひらきえず香りもたてずほろほろこぼる

ニンニクも大葉・茗荷も香のたたずいよいよわれもコロナの虜？  
コロナ菌の毒氣に冒され人間の心も熱帯び狂ひ出すらし  
家・金もすべてなくせるをみならし師走のベンチに撲殺さると  
日の暮をママ待つ園児ら喚声をあげて走れり犬さながらに

「食べたいな／＼着てみたいな」としばしの間 「やつぱりやめた」一人の年始  
ピチ／＼ピチュッ 加湿器の音のみかすかにて音なく閉ざす夕への唄

牧 雄彦 みたらひの滝 大

天川の村のはづれに洞ありて奥は見えざり神住まふらし  
大峰山ひねもす雲に覆はれてあの方角といふをうべなふ

「女人結界」大きく書かれし文字潜り男の子のわれは十歩あゆめり  
もみぢせる木の葉を透かし日が滲むひとときコロナの世を忘れたり  
わくらはを踏みつつ歩む山道の下よりひびくたぎつ瀬の音  
轟々と映にひびかふ滝の音木の間がぐれに水しぶき見ゆ  
もみぢせる木々に囲まれみたらひの滝は落ちたり虹を吐きつつ

松浦 禎子 そのままだに 羊

円覚寺前管長の足立老師コロナ禍中にひっそりと逝く  
境内にてすこやかなりし八年前庭師の体に鎌など下げて

実朝の奉じし仏舍利祀るという舍利殿道場にして門を鎖したる  
朝早く雲水並みて清めたる砂の箒目心して踏む

石段をのほりつめたる処にて誰をいざなうにじり口開く  
訊ねたき人みな身めぐりより去りて謎はそのままた祖父の自裁も  
開かれし畳の上の冬日射し「そのままに」といういつの世のこえ

松永 智子 声 嵐

ひとりして除夜の鐘の音ききはりさびしさのまたつてのりくる音

音絶えしにひとしの夜さめて聞く闇の音なりしづかなる音  
にひとしの屠蘇ととのへて帰りますこゑ若くしてふたたびの闇  
ものの音ひとの声待つあかときの影なるひとり闇の底なる  
闇にきく人の足音待つとなく待つのにして年あらたまる

おほかたはうつし世の人ならぬ声待つとなく待つ夜の闇の音  
朝食をととのへ人の帰ります音とほくなりふたたびの寂

### 三浦好博

目力

・銚

### 御代田澄江

りゆうぐうよりの使者

・茨

目に力あれば元氣と解るだらう鏡に向かひマスクつけみるこの頃は安易に妻に頼めない自助自助とあやつが悪い「お爺さん正月は餅やめなよ」か 打首獄門同好会嗚呼煩惱の数より多い嘘の数四苦八苦して顔見たくなし

心こそ三密にせむコロナ禍に我らの社会も子供社会もぬばたまの真夜の半時流星の十個数ふる「双子」のあたり大吠の岬に集ふ者たちに年の初めの天使の梯子

### 宮本靖彦

箕面紅葉

・変

### 茂木

斌

冬いちご

・埼

谷川を埋むる楓落葉かな箕面滝道冬来たりけり残り紅葉耀ふ朝滝道に人の少なしコロナに自粛滝にかかる楓の大樹紅葉の水染むる景幾世交らず滝見橋にのこる初霜しらじらとこぼるる紅葉と色をあらそふ

滝道の柵の修理の色新し紅葉保存の有難きかな紅葉は山のなだりに散り敷きて幾百年の名所を守る銀杏散る黄金色の葉を惜しげなく積もる土なくごみと掃かるる

### 三好聖三

はぐれ者

・伊

### もとむらしげと

刑事ドラマあるある

・そ

猫としか暮らせぬ男が存える畑が生み出す気を吸いながら猫たちが暴れる拗ねる爪を研ぐ数多の縛を打ち抜くように知ることは別れの兆しでもあって、肅々として傘をさす朝普遍への意識の薄い体験記読み終え煙草を吸いに出かけるはぐれ者きらわれ者のスピノザへ入れ込む今日のやさぐれ者は本当のことを言うから嫌われる？おおいに笑うスピノザは朝スピノザがレンズを磨くかたわらに腹だし眠る斑毛の猫は

雪かとも真綿かとも見る花を結び今年も和ます終の花コロナ下に押し潰さるるかの吾をしも柔らげはげます花か終何となくなんとなくとて今日も亦死を押しやりてそこそこ暮らす2000年の日記ふと見る甲状腺病み将来遺伝子治療と医師に言はれし今もまだ病み続けをれと甲状腺ホルモン補充薬に救はれてをり地球に無き砂の微粒子「りゆうぐう」より持ち来たる使者何を語れる散り敷ける百日紅落葉掃きゆけば紅き乾反葉幽けき音す

ブルトップ引けばブシュッといふ音の心地よきかな日は沈みたり夕コ殴りぼこぼこにする意なりとか最も嫌ひな乱暴狼籍高輪に先駆け名乗る道の駅伊豆ゲートウェイ函南のあり老いてなほ足鍛へねばコロナ禍の秋をマスクにGoTo三森山急斜なる高尾参道男坂百八段を一気のかなはず斑入りヒイラギの花が咲きたり真つ白な金平糖を乗せたるやうな冬いちご艶めく葉かげ鳥たちの難を逃れし赤き実ひとつ

石段を転げて落ちて死にし人今日二人見きドラマの中で倒されし手の傍らに程のよき石がありけり殺意が兆す無防備に背を向け刺され死者となるこの悪漢はお人好しなり居酒屋に捜査機密をまき散らすドラマの中の二人の刑事振り返れば一目でわかる近さにて尾行の刑事はふと横を向く終盤にさりげなき妻の一言が閃きを生み刑事駆け出す刑事らが「待て」と飛び出す瞬間をナイフ振り上げ犯人は待つ

山下雅子 白樺 習

貴重なる元号国の令和三年いすわるコロナといつまでならむ  
幹のみの白樺ひとと泰然と主しのばす五年変わらず  
今朝もまた間をおき頭上を近々と自衛隊機とぶ不気味を積みて  
電話口に「もりかけさくら」を憤る卒寿の友の声は変わらさず  
シチューどうぞ愛わりないと玄関にマスクの娘まさしく飛脚  
晩年に出合わすコロナウイルスの見えぬ手強さじわり迫れり  
睦み合いし親の夫婦の心情などふとも思えり風鈴が鳴る

山野 幸司 正月 沖

正月は孫寄り遊ぶ庭の中間は早し夕暮るるまで  
くぬぎ切る手に汗にじむ森の中樹はゆっくりりと空を切りさく  
くぬぎ葉の枯れ散り誇る庭の隅風に揺れ合う音のかなしげ  
児を抱き二人娘を連れ青年の背に陽を引く保育の迎え  
草の中元気でござる蔓伸ばす冬至カボチャの笑い声する  
誰もいぬ朝の神社に光差す今年なんだか佳き年ならん  
部屋中の置かれし孫のぬいぐるみみんな笑顔に我見つめおり

横田 敏子 銀世界 福

元朝の白ひと色の銀世界煩惱なべて清められたし  
然りげなく生きてゆきたしこの年の目標というほどにあらねど  
十年の歳月は記憶を薄れさすかの震災も原発事故も  
コロナとう得体の知れぬウイルスはあれよあれよと世界に蔓延り  
日溜りに揺れるピオラよ雪降れど風吹けど強しその小さないのち  
新しき手帳に記す「今日は雪」一月一日静かに暮れぬ  
いわきより三陸に続く海原よ今日のひと日を揺蕩いおらん

吉永惟昭 雪 熊

花落ちしここえ皇帝ダリアにはしの字くの雪の舞い舞う  
娘にも会えぬコロナの第三波あおりひきずる年越しのそば  
陽のうすき令和三年迎えたる翁と媪二人に雪が  
天に満つ靈氣詠まうは恐れ多し大地に置かな霜となる詩  
霜となり露と果てゆく詩すら修めもならず掌に取れぬわれ  
年の数餅喰いし頃憶う 雪 飛散してゆく記憶のへんべん  
折角の白路なれど車椅子のスロープなれば掃きておかねば

朝井 恭子 月山湖 森

カーナビの声を頼りに道辿る「あと一キロで月山湖です」  
山間にひそと静もる月山湖くらき水面に冬を宿しぬ  
照り陰りはげしく変る峠越ゆわれの一生もかくあり経しか  
空暗み曇ふりくる山道に踏むをためらう真っ赤な落葉  
さびさびと冬まつ刈田に低き虹たちて七つの彩鮮らけし  
鳴あまた刈田に餌を漁りおり生きとし生けるものひたすらに  
大いなる公孫樹の木にも注連はりて年の始めはアニミズムなり

磯田 ひさ子 カミソリの木 森

ふりかかると苦すら恵みと受けとむる気力のうする老いのちらつく  
体力は耐力ならむ老いつげば悲しきことはくはばら くはばら  
錦木をカミソリの木とも幼きに教へて見つむそれぞれ紅  
冬休みのお手伝いと十歳が仏具をひたすら磨きくれたり  
甘露煮といはずに柚子のコンポート黄に照るこころ友より賜ふ  
西王母の蜜ほぐれずコロナ禍に振りまはさるる年暮れむとす  
なかなかにしぶとき自然九年前の余震と伝ふる暮れの震度五

市原やよひ

冬キャンプ

・萬

小野雅子

マスク

・羊

静寂を破りて響く除夜の鐘寺へと向かう人の列なし  
 コロナ禍に閉じ込められていたような一年今し過ぎ行かんとす  
 寒波予報出てたる中を年越しのキャンプに行きたり孫の二人は  
 老人の理解を越ゆる冬キャンプ流行りなるとかテレビのニュース  
 キャンプ地のビデオ電話に映りたる冬木立の中なるテント  
 キャンプ中の孫とビデオ通話の「おめでとう」こんな事も出来る世となる  
 何もかも初めてなれば楽しくて寒さ忘るる冬キャンプとや

大浪美雪

焚火

・森

草とりにうつつむく頭を踏み台に飛びたるは何 ひよとひと声  
 いつしらに朝露を踏む季のきて手つかずのまま本山をなす  
 ポケットに焚火の匂い燠の中さつまいも一本灰となしたる  
 風邪の種もらいしほどこ楷の木のみみじもみじに見惚れいるうち  
 暖かき帽子下され手のひらを鏡に見立て見よとのたもう  
 うす曇る灰青色の空のもと古墳の丘は草もみじせり  
 艶もてる草もみじの中動けるはつぐみぞつぐみ冬の使いの

奥田陽子

風のゆくえ

・羊

昨日しきりに喪服の事を思いき君の逝きしを聞きいて今朝は  
 病む人を残してゆかんそのころまず思えれど測るに難き  
 病む妻を気づかう言葉聞きし日のちいさき雨の音よみがえる  
 酒量時に過ごし給えば遠きより伝え言など受けし日もあり  
 うつくしき月のいでたり斯かる夜は杯傾けて居たまいし君か  
 人去りてさむきこの秋黄ばみたる樹樹のあわいの空をみている  
 すすき穂のなびきに風のゆくえ知る病む人を後に残し給えり

見てみればなかなか焦げず目を放す束の間に黒くなれるトースト  
 弾力のうすれきたれば伸縮性あるとふシャツは身を締むるのみ  
 今日もまた守られれると思ふなり探す古事記はやく見つかる  
 「灯ともし頃」ことばなつかしマンションの廊にあかりの次々点る  
 『ベスト』に描かるる場面そのままにロンドンの町はなるる人々  
 マスク忘ることなくなりてあいさつは交はず眼と眼 恋人のやう  
 ポインセチアの赤と緑が日に映えてコロナに揺るる年暮れてゆく

久我田鶴子

夢の枕元

・羊

おふはれて髪をひつぱりしをさなき手 寝たきりの夢に曾祖母の夢に  
 曾祖母の枕元にて聞きとめし夢にわが名を呼ばふその声  
 うは言か寝言か知らず明らかに寝かされし日の幼きわが名  
 うす暗き部屋より移され奥の間に寝かされてよりの死までの時間  
 入れ違ふやうにこの世を去りしかば曾祖母の記憶おとうとは無き  
 カステラを焼くのが上手、かつこよく煙草を吸つた——人伝てに聞く  
 祖母がやきもち焼くほどわれを可愛がりくれしと聞くさへ懐かし曾祖母



## 今月の二人

### はりつめたる心

関西 正子

花咲かば夫に供うるサボテンの鉢を洗いてその日待つなり  
 最後まで夫が楽しみ待ちたりしサボテンの花今朝開きたり  
 花咲くを見ずに逝きたる亡き夫の仏前に供う鉢の一つを  
 夕方に二階の軋む音のして夫いますかと思う吾  
 夫いませば温かき鍋物するものをひとり夕餉は簡単におわる  
 机上にて釣りえさづくりする夫に声かくる夢見たりて目覚む  
 はりつめたる心ようやく薄らぎて小さき庭に草花植うる  
 湯あがりの火照りに冷たきビール飲むひとりの夕べ少し静けき  
 今日ひと日七人に茶の稽古なし夕べに帰る山科の道  
 稽古日の続けば心ひきしまり休みとなれば一日ひとひけだるし  
 いずこより金木犀の香りたついつもと違う今年の秋は  
 コロナのせいで玄関払い病棟横に残念ながら電話で見舞う  
 友の声痛みあるのか辛いよう両足吊し複雑骨折

### 夫のこと

夫は令和二年四月十三日に永眠いたしました。七十六歳でした。静岡出身の夫と四十八年前知り会い、結婚して京都で暮らし始めました。娘二人にも恵まれ平凡な生活を送っていました。夫の趣味は海での活動で水中カメラやダイビングやヨット遠征と、仕事の合間ほとんど自宅には居ない自由な夫でした。昨年末に病院で検査を受けた結果、「食道ガン」が見つかり、肺まで転移をしていました。手術は出来ず抗がん剤治療を三か月も行いましたが、そのかいてもなく延命治療も希望しないまま、私を残して帰らぬ人になりました。留守が多かった事もあってはじめは寂しいとは思っていませんでしたが、月日が経過することに想いめぐらす日が多くなってまいりました。そんな時にはペンを走らせ、短歌の中に夫への想いを托しています。私の趣味は茶道で、指導者としての日々を送っていますので、夫を亡くした後も元気で充実した生活が出来ていることを幸いに思っています。これから先も短歌で夫と語り合い、想いを伝えていこうと思います。残されたこの世で短歌仲間達と仲よく、また茶道人生をも大切にした生活をと願っています。



## 今月の二人

望郷

森川 淑子

百濟より渡来の人らに教はりし文化は大和に根つき広ごる果てしなき空は続けり京城よ思ひはるけきわが生れし町戦中に米機は空を通るのみ朝鮮半島に爆撃あらず

併合の三十五年間に倍増す 人口、寿命、収穫の率

最新のコンビナートは北鮮に建設をして残してきたり

水豊ダムは東洋一と言はれたり北朝鮮に今もはたらく

抜くるやうな青空の秋 天災のほとんどなかりし朝鮮半島

薬学校は朝鮮の民も受け入れし内地に先駆け男女共学

終戦後「帰属財産」残すままりユック一つに引き揚げて来し

引き際は肅々として江戸城に倣ひしごとく潔く去る

成功者に地縁、血縁たかりたり無下には出来ぬ韓の慣はし

収奪論、反日教育、民族主義歪曲されし歴史は虚し

漢字止めハングルのみの終戦後古書を読む人わづかなるべし

### 日韓の歴史を

一九一二年、併合により日本が統治する事になった朝鮮半島へ先駆者として渡鮮したのが祖父の一家です。京城で菓の卸売業を営んでいました。京城生まれの私にとっては昨今の日韓の關係悪化、北朝鮮の残念な状態も氣にかかります。植林と教育に尽力し同化政策の日本、歴史認識の違いは反日主義が宗教化しているように思えます。五百旗頭真氏のワシントン公文書館の文書によると対日占領案ソ連・米・英・中国の四ヶ国に分割する案、免れた日本の幸運、南北に分割の朝鮮半島の不幸を思います。昭和一五年の北鮮途上の祖父の詩に「北鮮至る所に工場を設く、荊はしばみを刈り去って氣勢揚がる、利水電機は産業を資け、今より発展又量り難し」五五〇万坪、四五〇〇〇人の従業員、人口一八万規模のコンビナートは日帝支配の遺産(?)の一例です。終戦時帰属財産は半島の八〇パーセント日本の資産、公的と個人、連合軍に接収され昭和三年に南は韓国に引き渡されました。日本人たちはよく働きよく遊び雅号持つ者多く、内戦を心配し憂いておりました。血税を投入し、朝鮮の土になる覚悟でした。日韓の歴史を冷静に見直して欲しいです。

◆今月の二人・関西正子作品評◆  
 今日ひと日七人に茶の稽古

関西さんは京都市山科区在住。昨年の四月に御夫君を亡くされたばかりだ。病の発見から数ヶ月後に迎えた死だったという。花咲かば夫に供うるサボテンの鉢を洗ってその日待つなり次の歌を読むと、夫が咲くのを最後まで楽しみにしていたサボテンであつたらしい。だからこそ、花が咲いたならいち早く夫に供えようと鉢を洗って待っているのである。

夫いませば温かき鍋物するものをひとりの夕餉は簡単におわる

もしも夫がいたならば、と思うことは、食事に限らずいろいろあつたことだろう。夫がいたからこそ手を掛けてしていたことも、自分ひとりのためでは手抜きにもなつてしまふ。そこにある喪失感。惻々と寂しさが伝わってくる。

・はりつめたる心ようやく薄らぎて小さき庭に草花植うる

・湯あがりの火照りに冷たきビール飲むひとりの夕べ少し静けき

夫を失つた後の張り詰めていた心も落ち着きを徐々に取り戻し、庭に草花を植えたり、湯上がりのビールを楽しむ余裕も出てきたようだ。仕事の合間にも海へ出かけることが多く、留守がちだったという御夫君。もしかしたらそれで、関西さんはひとりの時間の過ごし方を鍛えられていたのかもしれない。

・今日ひと日七人に茶の稽古なし夕べに帰る山科の道

七人に茶の稽古をして山科の道を帰る充足感。関西さんに茶道が、茶道の師範としての活動があることが、すくくと身を立たせているのだと知る。もう一つ、短歌とともに。

◆今月の二人・森川淑子作品評◆  
 「帰属財産」残すまま

評者・久我田鶴子

森川さんは、大阪の豊中市在住だが、生まれは京城だという。日本領朝鮮の行政区域、現在のソウル特別市である。一九一〇年の韓国併合により、朝鮮半島に渡つたのは祖父の代。

・果てしなき空は続けり京城よ想ひはるけきわが生れし町

その後の歳月のなかで「京城」は消え、町も森川さんが生まれた頃とはすっかり変わってしまっただろうが、それでもやはり懐かしく、「わが生れし町」と想いを馳せるところである。

・戦中に米機は空を通るのみ朝鮮半島に爆撃あらず

この頃、森川さんは何歳くらいだったのか。戦中の記憶として、朝鮮半島で米軍機による爆撃はなかったという。

・終戦後「帰属財産」残すままリュック一つに引き揚げて来し戦争が終わわり、リュック一つでの引き揚げ。朝鮮半島で築いた財産は「帰属財産」として没収された。日本統治下にあつた朝鮮半島において、そこで一生懸命に働き、生活していた家族

そのすべてを無にして引き揚げてこなければならなかつた人たちの思いを想像しようとしても、とても私には想像しきれない。

国の植民地支配の歴史を考えないわけにはいかないし、朝鮮半島の歴史についてもきちんと言えるだけの持ち合わせがない。

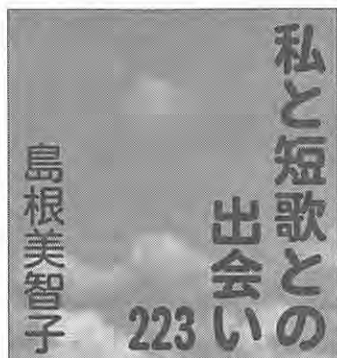
・収奪論、反日教育、民族主義歪曲されし歴史は虚し

・漢字止めハンゲルのみの終戦後古書を読む人わづかなるべし

どこまでが歪曲か、ハンゲルを使うようになったことに日本の国がしたことが関わっていないか。難しい問題を突きつけられた思いがする。おいそれと同調するわけにもいかないので、宿題ということにさせていただきます。

私と短歌との出会いは、市の生涯学習の短歌教室である。退職後のありあまるであろう、この時期に何かしたいと思っていた時だった。平成十四年のことである。読むことは興味があったものの、詠むことは初めてである。一ヶ月に二回の講座、一回に五首提出、先生が全首を丁寧に添削し、二時間三十分で終了となる。全員の五十首なので先生の一方的な歌評で終わる。添削が行き届き、私の未熟な短歌もリズム良く、整ったものになるが、次第にこれが私の短歌かと疑問が湧いてきた。それでもお互いに歌評など思いも寄らず続けるも、やがて退会を決めた。平成二十五年に茨城歌人で活躍中の先生が短歌会を立ちあげて、一月に一回二首提出で活発に歌評をし、現在に至っている。平成二十七年には地中海茨城支社へ入会、御代田先生を中心に学んでいる。平成十四年の短歌講座と同時期に「万葉集を読む会」に参加した。隣の市へ七年間通い巻二十を完了。先生は大学の勤務後なので夜間二時間である。個人で通読することは難しいが、先生の歌を読むリズムの良さ、解説の分かり易さにより万葉集に魅了された。講義の後全員での朗読も楽しい思い出である。その年の秋「文学散歩」が計画された。「山の辺の道」である。奈

良の田園風景、柿の朱が秋の陽に照る風景はすばらしかった。沢山の歌碑を読むも記憶に今はなく残念である。次に大和三山に登る。香具山は神聖な山と言われるが現在は草の繁茂した丘だった。自分の足でその場に立ち空気を風を感じる事が出来た。翌年は吉野へ、奥千本まで杉木立を歩く。山桜の花びらが風に舞い散る谷あいには建つ



西行庵に着く。俗塵を避け吉野の桜を愛し、今も桜に囲まれて在る。また桜満開の弘川寺の西行の墓参を済ませた。翌年は越前と越中を旅した。越中国守として過ごした五年間は家持にとって、山紫水明の地に花を愛し、水辺で遊び、歌会三昧と一番良き時代であり大切な時代だったのである。都に残していた妻を、越中に呼んでから明る

いはずむような歌心を發揮していると評されている。私の大好きなよく愛唱する歌。

・春の苑紅にほふ桃の花下照る道に出で立つ娘子（巻十九・四一三九）

・もののふの八十娘子らが汲みまがふ寺井の上の堅香子の花（巻十九・四一五〇）

寺井の跡は現在四方を竹で囲まれて、当時の雰囲気を残し、娘子の姿が目に見えよう。高岡市民は特別な思いがあるよう。各地に堅香子の球根を植えている。高岡市内で一人の老人が万葉歌を吟ずるのを聞き深く市民に浸透しているのを感じた。二上山（高岡市）に立つ家持像二十九歳の時の像は若さと聡明さを表現しており心奪われた。

・朝床に聞けばはるけし射水河朝漕ぎしつづ唱ふ船人（巻十九・四一五〇）

この歌を思い船頭さんの漕ぐ渡し船で射水川を渡った。詠まれた現場を見て歩いて、足で実感することが短歌を詠むには大切と良く解った旅だった。巻二十まで読み終え、また詠まれた土地を旅した七年間は、私の人生後半の財産となった。この講座の友人から御代田先生を紹介いただき、地中海へ入会と繋がり感謝しております。今後も茨城支社の皆さまと作歌に励み成長できますよう願っております。